



## ～日本の健康・世界の健康～

### やさしい日本語を使ってみよう

名古屋市立大学大学院看護学研究科 国際保健看護学 教授 樋口 倫代

No.556で、日本語に制限のある人びととのコミュニケーションの際の選択肢について書きました。そして、1995年の阪神・淡路大震災後、防災分野から普及がすすんできた「やさしい日本語」のことをご紹介しました。

やさしい日本語とは、難しい言葉を言い換えるなど、相手に配慮したわかりやすい日本語のことです。日本語能力試験N4～N5程度とか、小学校3年生程度の語彙レベルの日本語と説明されることも多いようです。

2000年代に入ってから、平時の情報発信、例えば行政サービスや国際交流でも使われるようになってきているようです。2013年には、NHKがやさしい日本語で書いたニュース「NEWS WEB EASY」を公開し始めました。ために、インターネットで「やさしい日本語」を検索してみてください。おそらく、さまざまな自治体や団体による解説や手引きがヒットすると思います。

そのような中2020年に、出入国在留管理庁と文化庁が「在留支援のためのやさしい日本語ガイドライン」を公表しました。最初のガイドラインは、特に書き言葉に焦点をあてたものでしたが、その後、話し言葉のポイントや研修のための手引も出されています。(https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo\_nihongo/kyoiku/92484001.html)

それでは、やさしい日本語を書くには、具体的にどうしたらよいのでしょうか？講義で学生に尋ねてみると、難しい言葉を使わない、漢字にふりがなをつける、1文を短くする、写真やイラストを使う、などの答えが返ってきます。もちろんそれらも工夫すべき点です。しかし、それだけではありません。上述のガイドラインを参照すると、それ以外にも以下のような点があげられています。

- ・伝えたいことを整理し、情報を取捨選択する。
- ・不足している情報を補う。
- ・3つ以上のことを言うときは、箇条書きにする。
- ・回りくどい言い方や不要な繰り返しはしない。
- ・カタカナ語はできる限り使わない。
- ・二重否定を使わない。
- ・受身形や使役表現をできる限り使わない。
- ・曖昧な表現はできる限り使わない。
- ・文末は「です」「ます」で統一する。
- ・重要な言葉はそのまま使い、書き換えを添える。
- ・時間や年月日の表記はわかりやすくする。
- ・読みやすいフォントを使う。

自治体などが独自に出しているガイドラインや手引でも、おおよそ同じようなことを指摘しています。

多くのガイドラインや手引では、例文や練習問題を付けています。少し長くなりますが、印象的なものを1つ引用してみます。

「愛知県では、交通死亡事故が多発しており、昨日現在の交通事故による死者数は115人で全国ワースト1と、憂慮すべき事態となっています。この状況を広く県民に訴え、安全行動の実践を促して交通事故の抑止を図るため、愛知県交通死亡事故多発警報

等発令要綱に基づき、ここに「交通死亡事故多発警報」を発令します。県民の皆様におかれましては、交通安全を自らの問題としてとらえていただき、悲惨な交通事故を起こさないよう、また、交通事故に遭わないよう、お願いいたします。」これをどのように書き換えますか？

解答例は、「愛知県では、今、交通事故で死ぬ人が増えています。車を運転するときや、道を歩くときは、よく気をつけて下さい。」です。(愛知県発行『「やさしい日本語」の手引』18ページ)大切なことを伝えるということの本質を考えさせられる例題だと思えます。

インターネット上では、専門家によって開発されたやさしい日本語作成支援ツールも無料公開されています。「やんしす」、「やさにちチェッカー」、「リーディングチュウ太」など、使い勝手はそれぞれやや異なりますが、いずれも日本語の難易度をチェックして教えてくれます。上記の名前で検索するとすぐに見つかるはずですが、今後、さまざまなシーンで、やさしい日本語を使ったお知らせやポスターなどを作る機会は増えてくると思いますので、そのような時はぜひ活用してみてください。

ここまでは、書き言葉のやさしい日本語について概説しました。書き言葉の場合は、ある程度時間をかけて準備できますし、支援ツールで確認することもできます。それでは、話し言葉でやさしい日本語を使う場合はどうしたらよいのでしょうか？基本的に、伝えたい情報を取捨選択して整理する、短く切って話す、あいまいな表現は使わない、難しい言葉、カタカタ語、オノマトベを使わない、二重否定や尊敬語・謙譲語を避ける、などは書き言葉での工夫と共通しています。

話し言葉の場合、相手がどの程度のやさしい日本語を必要としているか判断しながら使っていくなくてはならないことが書き言葉との大きな違いでしょう。出入国在留管理庁が令和3年に実施した「在留外国人に対する基礎調査」では、自分の話す・聞くの日本語能力を7段階で尋ね、7,538人から回答を得ています。うち、「自由に会話できる」とした24%を含め、44%の人は「長い会話に参加できる」以上の回答でした。これらの人たちは、あえてやさしい日本語にする必要はないでしょう。重要なのは「相手の話をしっかり聴く」「反応を見る、臨機応変に対応する」ところかと思えます。特に、「日本語能力が非常に高いと判断した場合はやさしい日本語はやめる」、「いくらやさしく話しても意思疎通が難しいと感じた場合は通訳や機械翻訳の利用に切り替える」などの対応は大切です。ちなみに、機械翻訳はやさしい日本語を使うと翻訳精度が高くなることが知られています。

保健医療分野では、防災分野ほどやさしい日本語が普及していません。日本語を母語としない人びとが保健医療にアクセスしようとする時の「言葉の壁」が少しでも低くなるよう、やさしい日本語を活用していきたいと考えます。